

ガンディー教育思想における「仕事教育」理念の変遷

—アシュラムにおける教育から国民教育への展開—

河井由佳

(2013年10月3日受理)

The Changes of “Work Education” Idea in the Educational Philosophy of Mahatma Gandhi
— The changes from the education in his ashrams to the national education in India —

Yuka Kawai

Abstract: In India, “work education” has been thought as important in the educational policy after independence. “work education” originated as “basic education” which Mahatma Gandhi advocated as national education in 1937.

The aim of this paper is to clarify the special features of Gandhi’s “work education” ideas, paying close attention on how the ideas develop from the educational practice started in the small groups called ashrams into the plan of national education. I used documents written by Gandhi and analyzed the changes between his “work education” ideas during his stay in South Africa and those after returning to India.

This paper has clarified the following things. “work education” idea and Gandhi’s interest in national education were already obtained in South Africa. However, this initial form of “work education” was aimed mainly at the post-secondary education which was accessible to only a small group of people. In other words, Gandhi did not associate “work education” with national education. After returning to India, he recognized the serious condition in India, and felt the necessity for national education more than before. Especially, he considered primary education the highest priority of national education, but he opposed the introduction of the compulsory education aimed only for improving literacy which would be a mere imitation of the occidental systems. He therefore introduced the compulsory education which was called “work education” for learning agricultural knowledge or technology and the dignity of labor as education suitable for India whose population was comprised mainly of farmers. That is, the change of his educational thought after returning to India was a process for completing the idea and method of “work education” which were indispensable in order to establish a different compulsory education system unique to India from the Occident.

Key words: India, work education, national education, Mahatma Gandhi

キーワード：インド，仕事教育，国民教育，マハートマー・ガンディー

1. はじめに

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：大塚 豊（主任指導教員），河野和清，
古賀一博

インドでは、独立後の教育政策の中で、初等・中等教育における「仕事教育（work education）¹⁾」が重視されてきた。この「仕事教育」は、生産性や技術の向上を重視する「職業教育（vocational education）」

とは区別され、社会性の習得や自立、労働の尊厳を重視するものであり、その始まりは、1937年に国民教育としてガンディーが提唱した「手仕事を通しての教育（education through manual work）」、いわゆる「ベーシック・エデュケーション²⁾」であった。ガンディー教育思想における「仕事教育」について、弘中は「この教育の帯びるガンジー的色彩ならびに他のアジア諸国の実践においても存在を推察せしめる独自の原理を考慮し、既存概念との別を意識し上記訳語とした³⁾」と説明している。また、C. J. ヴァルキーは、先行研究においてよく類似点を挙げられるデューイの教育理念⁴⁾と比較して、教育に取り入れる「手仕事⁵⁾」が実際に利益を生み出すものであること、「手仕事」を核としてすべての教科を関連づけて教えること、教育において「労働の尊厳」を重視していることなどから、その独創性が認められると指摘している⁶⁾。

その後も、仕事と関連付けられた教育は「仕事経験（work experience）」、「社会的に有用な生産的仕事（socially useful productive work）」と名称を変えつつも、インドの教育政策の中で継承されてきた。現在では、ナショナル・カリキュラムの一領域として「仕事と教育（work and education）」が取り入れられ、教育制度改革の重要事項として「仕事を中心とした教育（work-centred education）」が進められている⁷⁾。独立後の「仕事教育」については、ガンディー教育思想を継承したのか否かについての議論はあるものの、現在においてもインドの教育政策の中で「仕事教育」が重視されているのは事実である。一方で、セヴァグラム・アシラム⁸⁾などのガンディー思想を継承する民間団体において、ガンディーの教育理念は「ナイー・タリーム（新教育）⁹⁾」という名称で継承されてきた。今日では、国立農村研究協議会（National Council Rural Institutes）によって「ナイー・タリーム」が農村部の高等教育の推進策の一つとして取り入れられたり、アシラムにある「ナイー・タリーム」研究所の関係者がナショナル・カリキュラムの「仕事と教育」の編成に関わったり、ビハール州の教育政策として「ナイー・タリーム」の理念に沿ったガンディー主義の小学校の設立計画が進められたりするなど、一部のガンディー主義者だけの運動にとどまらない様相を呈している。

ガンディー教育思想の研究は数多くあるが、「仕事を通しての教育」の変遷について明らかにした先行研究は少ない¹⁰⁾。インドにおける近年の研究では、ガンディー教育思想の特質をまとめたものや¹¹⁾、現代におけるガンディー思想再考の一視点として教育思想を取り上げたものがいくつかあるが¹²⁾、「仕事教育」

の理念や方法が、国民教育を支える重要な構成要素として捉えられるようになる過程を分析したものは管見の限り見当たらない。日本国内の研究では、弘中がガンディーの「手仕事を通しての教育」の意味をその成立と発展の位相において明らかにしている¹³⁾。弘中論文では、仕事の教育的価値の自覚が行われたとして南アフリカ時代の経験を重視し、仕事教育理念の進展と確立においては、1937年頃に「全人形成」の不可欠の手段として「手仕事を通しての教育」を提唱したことなどの変化が指摘されている。また、独立後のインドの教育発展を理解するうえで重要な一つの流れとして、ガンディーによる国民教育運動の特質を明らかにした論文もある¹⁴⁾。しかし、これまでの研究において「手仕事を通じた教育」の内容や理念の変遷を南アフリカ時代にまでさかのぼり、国民教育の形成との関係において詳しく分析したものはない。

そこで本稿では、南アフリカのガンディーの思想に賛同した小規模集団において始められた教育実践をインドに帰国して22年後の1937年のワルダー会議で国民教育政策として昇華するまでの過程におけるガンディーの「仕事教育」の理念や方法の変化を分析する。そして、ガンディーの「国民教育」構想において、「仕事教育」はどのように位置づけられ、いかなる機能を果たすものと捉えられていたのかを明らかにする。その際、ガンディーの教育活動を①1893年に弁護士として南アフリカへ渡り約21年間を過ごした時期（南アフリカ時代）、②その後、インドに帰国し、1937年にセントラル・プロビンス州（現在はマハラシュトラ州）のワルダーで開催された「全インド国民教育会議」において「ベーシック・エデュケーション」を提唱するまで（インド帰国後）の2つの時期に分け、その教育思想の変化について、インド政府編纂の『ガンディー全集（全98巻）¹⁵⁾』、『自叙伝¹⁶⁾』、『南アフリカでのサッティヤーグラハの歴史¹⁷⁾』、『教育の再建¹⁸⁾』所載のガンディー自身の陳述を中心に分析を行う。

2. 南アフリカにおけるガンディーの教育実践と思想

（1）ガンディーの「仕事教育」着想の経緯

ガンディーは、1893年に単身南アフリカにわたり、弁護士としてインド人の人権擁護のために活動した。インドの国民会議派に倣い「ナタールインド人会議」を結成し、インド人居住地ナタールの立法議会に度々請願書を送った。とくに、インド人の滞在や入国を制限することとなった「教育テスト」の改善要求の嘆願書を送った。また、南アフリカにおける

インド人の教育問題の改善に向けて、政府との交渉だけでなく、世論に訴え協力を仰ぐためにインドの新聞や自身が主宰する機関紙などに多く寄稿した。

ガンディーによる「仕事」を教育に取り入れた集団的な実践は、1904年に南アフリカのダーバン近郊に創設されたフェニックス農園(The Phoenix Settlement)内に作られた学校から始まった。この農園は、ラスキンの『この最後の者にも』に感銘を受けたガンディーが、労働の尊厳を重視したラスキンの考えを実行するために仲間と一緒に作ったものである¹⁹⁾。ガンディーは、ラスキンの書から①個人の善は全体の善の中に含まれる²⁰⁾、②誰にでも労働で生計を立てる権利がある限り、法律家も床屋も職業の価値は同じである、③労働によって生きること、すなわち耕作者や手仕事の職人の生活は価値のあるものである、という教訓を得て²¹⁾、誰もが労働によって生計を立てていけるよう農園を買い、『インディアン・オピニオン』紙²²⁾の印刷所を移した。そこでは、30人の子どもが農園内に設けられた学校で教育を受け、3時間の学習、2時間の農作業、2時間の印刷所の仕事を行った²³⁾。1910年には、サティヤグラハ運動²⁴⁾参加者の生活の拠点として、ヨハネスブルグ近郊にトルストイ農園(The Tolstoy Farm²⁵⁾)が設立され、学校が作られた。30人の子どもが午後からの3時間学校に通い、その他の時間は、教師とともに労働に従事した。

ガンディーの「仕事教育」の実践は、ラスキンとトルストイの思想の影響が大きいフェニックス農園とトルストイ農園で始められたため、この二人の思想の影響が大きいことを先行研究は指摘している²⁶⁾。しかし、ガンディーの著作を詳細に分析してみると、彼に影響を与えた、先行研究が注目していない別の人物が浮かび上がる。それが、アメリカの黒人教育学者、ブッカー・T. ワシントン(1856-1915)である。ここでは、ワシントンのガンディーの教育思想への影響について考察する。

フェニックス農園設立以前の1903年の9月、ガンディーは『インディアン・オピニオン』紙に「奴隷から学長へ (FROM SLAVE TO COLLEGE PRESIDENT)」と題する記事を載せている²⁷⁾。ここで、識字と産業教育を組み合わせた実践を行った教育者として紹介されたのが、ブッカー・T. ワシントンである。その後、ガンディーは、ワシントンの作ったタスキーギ学院を参考にして、南アフリカに産業大学²⁸⁾を設立することを検討している²⁹⁾。また、「手仕事を通しての教育」を提案したワルダー会議の冒頭演説では、ワシントンの師であるサミュエル・C. アームストロング(1839-1893)からの影響³⁰⁾について述べており、彼らの思

想から少なからず影響を受けたと考えられる。それでは、ワシントンおよびワシントンが影響を受けたアームストロングの思想とはどのようなものであったのだろうか。

サミュエル・C. アームストロングは、南北戦争の北軍の士官として黒人部隊を率いた後、1868年にバージニア州に黒人のための中等後教育機関であるハンプトン学院(Hampton Institute)を設立した。この学校では、初等中等学校の教員養成や農業、園芸、商工業などの職業技術訓練が行われた。そこでは、手仕事(manual labor)を必修として、労働の尊厳が教えられ、ハンプトン・スタイルと呼ばれる道徳と手の訓練によって教養の向上を目指す教育、つまり「頭と心と手(the head, the heart and the hands)」の教育が重視された³¹⁾。また、生徒は手仕事によって学費を賄っていた。アームストロングの設立したハンプトン学院で学んだワシントンは、「ハンプトンへ行く以前は、教育を受けるということは、労働を逃れて楽な時間を過ごすことだと思っていたが、ハンプトンでは、労働の尊厳を学んだだけでなく、経済的な価値のためだけではなく個人が自立するためにも労働を愛することを学んだ³²⁾。」「ハンプトンでは、生徒は産業を通して自立しようと絶えず努力しており、その努力は人格の形成にとっても役に立った³³⁾。」として、アームストロングの教育について、楽しく働きつつ、労働の尊厳や労働による個人の自立の価値を理解し、働くことによって人格の形成が行われたと評価している。ワシントンは、後に自らの学院を作る際、地域の様子を見て回り、黒人の生活を向上させるにはその当時行われていた教育をただ模倣するのではなく、それ以上のことが必要と確信し、衛生教育と農業などの産業(industries)についての実学教育を重視した。実学教育に関しては、ハンプトン・スタイルを活用し、職業技術の習得だけではなく、労働の尊厳の理解や実践的で道徳的な基盤をもった自助(self-help)を促すことを目指した。ワシントンの作ったタスキーギ学院では、農場経営やレンガの生産だけでなく、学院の建物までも自分たちで作成し、労働を通じた徹底した自立を実践した。

ガンディーは、『インディアン・オピニオン』紙の記事で、黒人奴隷であったワシントンが経済的困難の中で、努力して学習し、後年、黒人の教育状況の改善に大きく貢献する教育者になった逸話を取り上げた。そして、タスキーギ学院では知識の習得と産業訓練(industrial training)を組み合わせた教育を重視し、100エーカーの広い農場での作業を初めとして、男子学生は印刷、大工、レンガ製造、女子学生は裁縫、料理、園芸、乳製品の製造の仕事を行い、学費はこれら

の労働によって賄われていたことなどを詳細に紹介し、「彼自身も成長するとともに、数多くの自国民を育て上げた。ワシントンの生涯を学びたいと思う我々にとっては、模倣すべき価値のあるものである³⁴⁾。」と結んでいる。

ワシントンは、黒人であるが故の様々な困難にもかかわらず、教育の力で自分自身だけでなく仲間の状況を改善するために立ち上がり、穏和な態度と深い思慮によって謙虚に反対者を説得して回り、黒人の状況の改善を目指した活動について知るとともに、知識の習得と産業を組み合わせた教育の重要性や、労働を通じた経済的・精神的自立の奨励、学費や学校の経費を生徒の労働によって賄うシステムなどを考案した。ガンディーが、自らの教育思想に密接に関連する教育方法上の示唆をこのような早い時期に得ていた事実は明記しておく必要がある。

(2) 「仕事教育」実践の積み重ねと真の教育の探究

南アフリカにおいて、ガンディーはインド人の技術教育のための設備を政府に要求する提案を支持するなど、職業訓練に関わる教育の推進に努めた。また、トルストイ農場においては、ガンディー自らが教師となり、協力者であるカレンバハ³⁵⁾とともに「仕事」を取り入れた教育実践を積み重ねていった。農場では、子どもたちも教師とともに労働に従事することが求められた。識字教育とともに若者全員に何らかの有用な手仕事必修とされ、チャッパル（革製のサンダル）の製作、大工仕事、料理などが活動に取り入れられた³⁶⁾。

これらの実践を重ね、ガンディーは「真の知識とは単なる識字ではなく、真の教育とは単に本を読むことではない。真の知識と教育は、自分の実状を理解し、その知識に照らして自らの生活や行動を形成することにある³⁷⁾。」と考えるようになった。さらにこの頃、「識字は必要であるが、人格の形成が第一であり、身体の統制と道徳の基盤の上に善用できるときに識字は役に立つ」との見解を明らかにしている³⁸⁾。

南アフリカ時代のガンディーの言及においては、職業訓練の重視、識字のみの教育への批判、学校の活動における仕事と教育の結合や教師の役割の重視、有用な手仕事の必修化など、後の「仕事教育」理念の中核となる諸見解がすでに表れていることが注目される。

しかし、トルストイ農場などのアシュラムで行われている「仕事」を取り入れた教育実践については、「すべてのインド人の子どもにこのような教育を施すことを目標とするが、学校と家庭で異なる行動基準をもつことは子どもにとって良くないことから、我々の主な

目的はフェニックスで暮らす子どもたちだけに教育を施すことである³⁹⁾。」と述べられており、インド人全体に対応したものとして捉えられてはいない。また、職業訓練に関わる教育についても主に中等後教育段階を中心に検討されている。

よって、この時期は「仕事教育」実践の積み重ねによって識字のみを重視する教育を推進することに疑問をもちながらも、「仕事教育」を国民全体への教育としてはとらえていない。また、アシュラムの学校において必修とされた有用な手仕事には様々な種類があり、掃除や身の回りの整理なども含めた労働は、教師とともに行うべきとするものの学習時間外に行われるなど、「仕事教育」の内容や方法についてもあまり具体化されていない。

(3) 「国民教育」への関心の広がりとは識字のみの教育の義務化への批判

『インディアン・オピニオン』紙では、アシュラムにおける教育活動の言及にとどまらず、インド人女性やイスラム教徒への初等教育の普及の必要など南アフリカにおけるインド人の教育問題が度々言及されている⁴⁰⁾。さらに、インド本国の教育についても、義務教育制度化の運動や各州の教育普及の取り組みなどが紹介され、本国でも財政不足により初等教育が十分に推進されていないこと等の問題点が挙げられている⁴¹⁾。このようにガンディーの教育への関心は、アシュラムにおける教育実践から南アフリカにおける教育問題へ、さらにはインド本国への教育問題へと広がっていった。

特にガンディーは、ゴーカーレー⁴²⁾の義務教育制度化運動に賛同する記事をたびたび掲載している⁴³⁾。ゴーカーレーは、1906年から全国的に広まった国民教育運動と同時期にボンベイを中心に起こった義務教育制度化運動の中心人物であった。ガンディーはゴーカーレーの活動を称賛してはいるものの、両者の義務教育に関する見解は異なっている⁴⁴⁾。内容について詳しく吟味することなく義務教育を法制化することを求めていたゴーカーレーに対し、ガンディーは、「農夫たちは誠実に暮らしている。世間の一般常識をもっている。両親や妻や子、村人への接し方をよく知っている。道徳規範を理解し順守している。しかし自分の名前は書けない。彼らに文字の知識を与えてどうするのか。…彼らはそんな教育を必要としないだろう。利害を関ることをせず、西洋思想の洪水に押し流されて、我々はこの種の教育を人々に与えるべきだと結論を出している。」と述べ、西洋の模倣による識字のみの初等教育の義務化への批判を明らかにしている⁴⁵⁾。

このように「国民教育」については、女性やイスラ

ム教徒を含むすべての者への初等教育の普及を最優先事項とすべきであるとしながらも、識字のみの義務教育に反対し、英語学習の過重な負担により母語の習得やインドの歴史文化の伝承がなおざりになることを懸念して母語で教授すべきとするなど、単なる西洋の模倣にとどまらない、インドに適した義務教育の内容を検討すべきであるとの見解を明らかにしている。しかし、識字のみの義務教育に代わる国民教育の具体的な理念や方法については、母語での教授や教育における人格の形成を重視するとの一部の意見にとどまっている。

南アフリカ時代のガンディーの教育思想においては、「仕事教育」を重視し、単なる識字能力の向上にとどまらない「国民教育」を普及すべきであるとするものの、「国民教育」の手段としての「仕事教育」の構想には未だ至っていないといえる。

3. 帰国後の教育思想の展開

(1) インドの現状認識と農村を基盤とした

「国民教育」の必要

1915年、21年ぶりに母国に戻ったガンディーは、ともに帰国した仲間やサッティヤグラハ運動賛同者の生活のために、アーメダバートにアシュラムを設立した。しかしながら、このアシュラムに不可触民の家族を受け入れたため、これを不満とした外部からの金銭的援助が停止した。また、信頼していた妻や仲間までもが不可触民とともに暮らすことは不服としたのである。こうして不可触民制に対するインドの理不尽な現状を知ることとなったガンディーは、深く悲しみ、これを貴重な教訓であるとして、不可触民制の払拭に一層尽力することとなった。また、「諸君は不可触民と考えられるべき人間など、地上に一人もいるはずがない、と認識しているけれども、諸君の家族や周囲にそれを伝えることが出来ないのである。なぜなら、諸君のすべての考えは外国語をもってなされ、また諸君のすべてのエネルギーはそれに費やされているからである⁴⁶⁾。」と述べ、不可触民制のような間違った精神が、知識や教育の普及にもかかわらず存在するのは、教育が英語の習得に偏っているからであり、母語の使用によって、自国や国民のことを考える教育が行われなければならないと考えた。

また、この頃ガンディーはインド農村の生活についても強い関心を寄せることとなった。1917年、農民からの窮状の訴えを受けてビハール州チャンパランに赴いたガンディーは、農村の深刻な状況は農民の無知によるものと考え、農民に対する教育の必要性を感

じた。そこで、直ちに6つの村に小学校を作った。村人が教師のために黒板と宿舍を用意し、ガンディーたちがそのほかの費用を負担した。学校の建物はチャンパランに多くあった竹や草でできた小屋であった。多くの村人は家財道具や着替えの服を一つも持たず、医療や衛生環境も整っていないかったため、各校に男女一名ずつ配置された教員は、村人の医療と衛生の世話も行った⁴⁷⁾。活動は2、3か月にわたり行われたが、この活動を振り返ってガンディーは、「永久的な基盤のもとにこの建設的な仕事を行うという望みが果たせなかったことを、遺憾の意を込めて告白せねばならない⁴⁸⁾。」と述べている。このチャンパランでの経験はガンディーの教育における関心を大きく農村へ向けさせることとなった。

1921年9月の『ヤング・インディア』紙でガンディーは、人口の85%が農業、10%が主に機織りに従事しているインドにおいては、国民全員が伝統的職業である農業の知識をもつ義務があり、すべての学校が都市から離れた広い畑をもち、屋外授業ができる場所に設置され、農業と機織りを教える必要があると述べている⁴⁹⁾。南アフリカ時代にサンダル製作や大工仕事、料理などが中心であった「仕事教育」の内容は、インドの状況にあわせて農業と機織りが最適とされたのである。

またガンディーは、過去50年間でインドの中流階級における教育の状況は向上したが、農村部の学校は激減し、村の子どもたちの教育が低下していることも明らかにしている⁵⁰⁾。このような状況を生み出した現行の教育制度について、ガンディーは次のように批判している⁵¹⁾。1) インド固有の文化を排除し外国の文化に基づいている。2) 心と手の文化を無視し、頭だけに限っている。3) 真の教育は外国語を通しては不可能である。教育が日常の事柄から遠ざかり、伝統文化を否定することに働いているため、自国の文化は野蛮で迷信深い無益なものに思われ、教育を修了する頃には自分の境遇に自信をもてなくなっているということである。

インドが抱える大きな問題である不可触民制の撤廃と農民の生活状況の改善、そして、インドの伝統と文化への理解と誇りを取り戻すために、ガンディーは、現行の教育制度に代わる国民教育の普及の必要をより強く認識することとなった。そして、英語の習得を重視する従来の教育ではなく、身近な生活や自国の文化や歴史を理解するための教育として、インドの国民の大部分が従事する農業に関する「仕事」を取り入れた「国民教育」の内容と方法を模索することとなった。

(2) 「国民教育」への「生産的仕事」の導入

「国民教育」を導入するに当たり、現実的な問題として、普及のための費用について考えねばならなかった。とくに初等教育を全国民に普及させるための費用は膨大なものであった。1921年9月の『ヤング・インディア⁵²⁾』紙において、ガンディーは次のような見解を明らかにしている。「もしインドですべての学齢時の就学が期待されるならば、現在のままでは教育に投資する手段をもっておらず、何百万人の親たちは目の前に押し付けられているものを払うことはできないため普及される教育は無償でなくてはならない。…こうして、子どもたちは、自分たちが受ける教育の一部あるいは全部を労働によって賄わなければならない。このような利益を生み出す唯一の普遍的な労働は、手紡ぎと手織りではないかと考える⁵³⁾。」こうして、農業従事者が大部分を占めるインドにおいて、必然的に国民教育に取り入れられる「仕事」であり、かつ収入源として財政問題を解決するために最適とされたのが、手紡ぎと手織りであった。手紡ぎの道具については、当初はチャルカという手回し式の糸紡ぎ車が考えられていたが、後にタクリーという安価で単純な構造の糸紡ぎの道具が、作業をすぐにでも始められるという理由で推奨された。こうして、インドの伝統的な産業でもある「布地生産にかかわる手仕事」を教育に取り入れたことにより、国民全員が学ぶべき教育をさらに確立し、教育を国民全員に普及するにあたっての財政問題にも対処する方法が見いだされたのである。

教育に生産労働を取り入れたのは、当初は国民教育の普及に関わる財政上の負担を軽減するためのものであったが、民族運動の高まりとともに、しだいに、自立した個人の育成や、国および地域への帰属感をもつ自立した社会人の育成のねらいが強調されていった⁵⁴⁾。

ガンディーは、インド人の民族運動を弾圧するため1919年に施行されたローラット法に反対し、非暴力不服従の運動を始めた。そして、学校を「静かなる社会革命の先鋒⁵⁵⁾」とみなし、インド社会の手本となるべきだと考えた。そのため、運動のスローガンであったスワデー（国産品の生産・愛好）の概念⁵⁶⁾を学校に取り入れることは重要なことであった。また、ヨーロッパにおける学校の運営については、宗主国による植民地の資源や農産物の搾取や資本家による労働者の搾取など、すなわち近代化の暴力に基づく財源から成り立つものとし、このような暴力（搾取）によらない、非暴力の原則に基づいて、教師や児童生徒自らの労働によって教育費を賄い、学校の運営を行うことが重要だと考えた。こうして「生産的な仕事」は、教育普及

のための財政問題解決の手段としてだけでなく、インド独立のスローガンである非暴力の原則に基づいた、自立した個人や社会人を育成するための「国民教育」の推進に欠かせないものとなった。

(3) インドに適した義務教育制度の導入

インド帰国後もガンディーは初等教育の普及を「国民教育」の最優先事項と考えていた。しかし依然として、初等教育を義務にすべきではないと考えていた。1928年10月の『ナヴァジバン⁵⁷⁾』の記事でも、「自分たちの糧となり賛成できる教育が提示されれば、義務にしなくても人々は教育を歓迎するであろう。」と述べている⁵⁸⁾。

しかし、インド国内では無償義務教育の制度化への大衆の期待は大きかった。特に、植民地インドの施策を示した1929年のハートック委員会の報告書が、これまでと同様に教育の質の向上を優先するものであったことから、独立運動の高まりとともに、教育の量の拡大を優先する義務教育の制度化の要求はますます高まっていった。

1935年のインド統治法に基づく州議会選挙で、全11州のうち7州で政権を握った国民会議派は、教育問題を解決するため自らの教育政策を必要とした。しかし、民衆が強く要求していた無償義務教育の実施に関しては、財政的な問題から立案が困難であった⁵⁹⁾。そこで、会議派はその方法をガンディーに一任した。1937年のワルダー会議直前に、彼は「私は、インドに適した無償義務教育の原理があると固く信じている⁶⁰⁾。」と述べている。そして、自らが構想してきた、農村の生活を基盤とし、インドの伝統や文化への理解と誇りをもった自立した個人や社会人を育成し、財政的な問題を解決しうる「手仕事を通しての教育」をインドに適した義務教育として導入することとしたのである。

ガンディー指導の下、1937年にワルダーで開催された「全インド国民教育会議 (All India National Education Conference)」において、次の4つの決議が出された。①7年の無償義務教育が、全国規模で施行される見解をもつ。②教授用語は母語とする。③手を用いる生産的仕事 (manual and productive work) を教育過程の中心に置き、すべての能力開発や訓練は、子どもの環境を考慮して選ばれた中心的な手仕事 (the central handicraft) に、可能な限り統合的に関連付ける。④この教育システムが次第に教師の給与を賄うようになることを期待する。

ガンディーはこの会議の冒頭演説で、「閣僚たちが教育を施しとして子どもに与えているため、彼らを無力にしている。もし子どもたちが教育費を自らの労働によって支払うならば、彼らは自信と勇気をもつで

あろう⁶¹⁾。」と述べている。

7年間の無償義務教育が施されるべきであるとしながらも、政府が義務教育を施すことよりもむしろ、生産的な仕事を教育に導入することによって可能となりうる、教育費を被教育者自らが賄うことによる、教育への個人個人の自主的な関わりを重視したのである。

会議に先立って出された提案では、「この初等教育は、子どもの学んだ職業への雇用を国が保障するか、その生産物を定価で買い取るかして、生活の糧を稼ぐ能力を身に着けさせるべきである⁶²⁾。」と述べている。

特に国民教育の優先事項としていた初等教育を義務教育として施行するにあたり、インドの現状にあった教育内容や方法を吟味した上で「生産的な手仕事」を教育に導入し、学校の自給の支援や、子どもたちが学校で身に着けた技術を生かせる職業への雇用保障などを国の役割としたことは、インド帰国後のガンディーの「仕事教育」の大きな特色である。

4. おわりに

南アフリカ時代のガンディーの言及には、職業・技術教育や労働の尊厳の重視、知識の習得と職業体験を組み合わせた教育の重要性、学校の経費を生徒の労働によって賄うシステムについての知識など、その後の「仕事教育」の特徴となる見解がすでにみられる。また、南アフリカにおけるインド人の教育問題だけではなく、インド本国の教育問題や国民教育への関心の広がりも見られる。しかし、この時期の「仕事教育」は、主にアシュラムにおける教育実践や中等後教育段階に関するものであり、国民教育と結び付けて言及されることはなかった。

国民教育普及の必要を強く感じ、国民教育に「仕事教育」を導入する構想を具体的に練り始めたのは、帰国後に、インド人の間にはびこる不可触民制の理不尽な現状や、搾取にあえぐ農村の深刻な状況を目の当たりにしてからであった。

農村復興がインドの最重要課題であると考えたガンディーは、農民が大部分を占めるインドの国民教育において、農業の知識や技術の習得を重視した。農民として生活するためだけでなく、インドの歴史や伝統文化を知る上でも、伝統的な職業である農業の知識は必要であり、将来役に立つ農業技術を習得するだけでなく、楽しく働きつつ、知識や労働の尊厳を身に着ける方法として農業に関わる仕事を国民教育に導入した。そして、財政的な問題を解決し自立した個人や社会人を育成するための生産的な仕事として手紡ぎや手織りを教育に取り入れたのである。

さらに、国民教育の優先事項であった初等教育に関しては、識字のみを重視する教育の義務化に反対し、その理念や内容と方法を深く吟味している。

農村における子どもの環境を考慮した身近な手仕事をすべての教科の中心に置くことにより、算数や理科は自分たちの生活に身近なものとなり、社会科や言語教育は自国の現状や文化伝統の理解に役立つものとなった。また、手仕事の生産物によって学費や学校の経費を賄うことで、義務教育普及のための財政問題を解決するだけでなく、政府の財政に頼らない非暴力の原理に基づく個人の自立や社会人としての自立や自主性を促すこととなった。

ガンディーにとって国民に普及すべき義務教育は、人々に強制するものでも、政府の施しに甘んじるものでもなく、国民が自ら必然性を感じ、自主的に関わっていくものであった。それは、単なる西洋の義務教育制度の模倣、つまり全国民を識字者にするを目的とした政府主導の義務教育の法制化をめざしたものではなく、農民の生活を基準とした、インドの状況を改善していく力をもつ自立した個人や社会人を育成するためのものであった。

このような識字を重視する西洋の義務教育の模倣に終わらないインド型の義務教育は、「手仕事を通しての教育」を媒介とすることにより可能になった。こうして、「手仕事を通しての教育」は、ワルダール教育会議における4つの決議の中で、義務教育の方針として提唱されたのである⁶³⁾。

【注】

- 1) 「手仕事を通しての教育」「仕事経験」「社会的に有用な生産的な仕事」「仕事と教育」等、名称の違いはあるものの、インドでは度々「仕事 (work)」に関連付けられた教育政策やカリキュラムが重視されてきた。本研究では、これらの「仕事」の名称がつけられた教育を統括して「仕事教育」と呼ぶこととする。
- 2) 1937年の国民教育会議で提案・採択され、国民会議派によって進められた教育計画。糸紡ぎや工芸品の製作など何らかの生産的な手仕事を通して行う教育のことである。
- 3) 弘中、前掲論文、1987年、20頁。
- 4) 例えば、アジット・K. ダースグプタは、ガンディーとデューイの教育理念の類似点として、教育はたんに将来の生活のための準備ではなく生活の過程そのものにあるということ、教育の経済的役割を重視していること、カリキュラムにおいて読み書き

- よりも子どもの実際の生活に関連する活動や職業に中心的役割を与えたことなどを挙げている。(石井一也監訳, アジット・K. ダースグプタ著『ガンディーの経済学』作品社, 2010年, 249-251頁。)
- 5) ヴァルキーは, manual training や handicraft という言葉を使っている。
 - 6) C. J. Varkey, *The Wardha Scheme of Education*, Oxford University Press, 1940. pp.160-162.
 - 7) National Council of Educational Research and Training, *National Curriculum for Framework* 2005, pp.58-61, p.116.
 - 8) 1936年にガンディーが作ったマハラシュトラ州ワルダーにある生活共同体。現在でもガンディー主義の人々が生活を共にしている。
 - 9) 1937年にガンディーが提唱した教育概念について, 教育政策の文書や報告書では「ベーシック・エデュケーション」(ヒンディー語ではブニヤディー・シクシャ)の名称で使うことが多いが, ガンディー主義者たちは「ベーシック・エデュケーション」も含めて, その後継承してきたガンディー主義の教育を「ナイ・タリム」と呼んでいる。2005年のナショナルカリキュラムでも, ワルダー会議でガンディーが提唱したものは「Basic Education」と表記し, その後に続くガンディー主義の教育については, 「Nai Talim」「Nai Talim Movement」としている。
 - 10) 「ガンジーの教育思想は生涯にわたる進化発展の跡をとどめるが, この認識に立つ研究についても, T. S. アヴィナシリンガムの著作において大体の輪郭を見, R. S. マニの著作において若干の考察を見る程度に過ぎない」弘中和彦「マハトマ・ガンジーの「手仕事を通しての教育」の意味について『九大比較教育文化研究施設紀要 第38号』1987年, 19～34頁。
 - 11) Sudharma Joshi, *Educational Thoughts of Mahatma Gandhi*, Crescent Publishing Corporation, 2008. Singh, M.K., *Gandhi on Education*, Rajat Publications, 2008. Akhtarul Wasey and Farhat Ehsas ed., *Education, Gandhi and Man*, Shipra Publications, 2008. など。
 - 12) ガンディー思想の再評価を試みた研究として近年出版されたものは, Susmit Pani and Niranjani Pani ed., *Reflections on Gandhi*, Zenith Books International, 2008. National Council Rural Institutes, *Perspectives on Nai Talim*, Serials Publications, 2010. Palash Handique and Monjit Gohain and Hemanta Saikia ed., *Re-thinking Gandhi*, SSDN Publishers & Distributors, 2013. Ravindra Kumar. *Gandhi in Current Perspective*, Gyan Publishing House, 2013. などがある。
 - 13) 弘中和彦「マハトマ・ガンジーの「手仕事を通しての教育」の意味について『九大比較教育文化研究施設紀要 第38号』1987年, 19～34頁。
 - 14) 弘中和彦「インド国民教育運動におけるマハトマ・ガンディーの役割」『アジア教育 第2号』アジア教育学会, 2008年, 1～11頁。
 - 15) Collected Works of Mahatma Gandhi Online (<http://www.gandhiserve.org/cwmg.html> 2012年5月10日アクセス)
本稿では全98巻のうち, 南アフリカ時代からワルダー会議に至るまでの第1～73巻までを参照。
 - 16) M. K. Gandhi, *An Autobiography*, Navajivan Publishing House, 1927.
 - 17) M. K. Gandhi, *Satyagraha in South Africa*, Navajivan Publishing House, 1928. (田中敏雄訳『南アフリカでのサティヤグラハの歴史』(全2巻)(東洋文庫736)平凡社, 2005年。)
 - 18) Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938.
 - 19) M. K. Gandhi, *An Autobiography*, Navajivan Publishing House, 1927, pp.250-252.
 - 20) 「最も富裕な人というのは自分自身の生の機能を極限まで完成させ, その人格と所有物の両方によって, 他人の生の上にも最も広く役立つ影響力をもっている人をいうのである。」(飯塚一郎訳, ラスキン著「この最後の者にも」五島茂責任編集『世界の名著41』中央公論社, 1971年, 144頁。)
 - 21) M. K. Gandhi, op.cit., 1927, p.250.
 - 22) 南アフリカにおけるインド人移民の世論を高め, インド人権擁護運動の普及と強化を図るために1903年から発行された週刊機関紙。
 - 23) 弘中和彦『万物帰一の教育』明治図書, 1990年, 105-109頁。
 - 24) 1906年に南アフリカのトランスヴァール政府によって, 登録書がなければ居住権がないとするアジア登録法案が出されたことに反対し, ガンディーは, サティア(真実, 真理)をアングラハ(把握, 探究)するという意味を込めた運動を展開した。
 - 25) 農園の名前は, 当時, ガンディーと親交のあったトルストイの名前にちなんでつけられたものである。
 - 26) M. S. Patel, *Educational Philosophy of Mahatma Gandhi*, Navajivan Publishing House, 1953, pp.81-87, p.259.

- 27) 「152. From Slave to College President」 CWMG Vol.3, pp.237-240.
- 28) 記事には、「the new College on the same lines of industrial training as in the American Institute」とある。(「116. An Inter-State Native College」 CWMG Vol.5, p.125.)
- 29) タスキーギ学院のような「the new College on the same lines of industrial training as in the American Institute」を設立すべきであることを提案している。(「116. An Inter-State Native College」 CWMG Vol.5, p.125.)
- 30) ワシントンが通った黒人のための農業・教師訓練校であるハンプトン研究所の設立者であるアームストロングについては、その著作 *Education for Life* が、カーカー・カーレルカルによってガンディーに紹介され、特に「手の教育」の章に興味をひかれたことが、ワルダー会議の冒頭演説で述べられている。
- 31) James D. Anderson, *The Education of Blacks in the South 1860-1935*, pp.33-36.
- 32) Booker T. Washington, *Up from Slavery*, Dover Publications, 1995, p.35.
- 33) Ibid., p.42.
- 34) 「116. An Inter-State Native College」 CWMG Vol.5, p.125.
- 35) Hermann Kallenbach (1871-1945) ドイツ人の建築家。ガンディーに協力し、サツティアグラハ運動の指導者となった。
- 36) M. K. Gandhi, *Satyagraha in South Africa*, Navajivan Publishing House, 1928, p.218.
- 37) 「189. Will Indians Yield?」 CWMG Vol.9, pp.305-307.
- 38) 「160. "Hind Swaraj" Chapter XVIII: Education」 CWMG Vol.10, p.300.
- 39) 「108. Our Aim」 CWMG Vol.9, p.189.
- 40) 「363. Letter to Minister of Education」 CWMG Vol.4, pp.402-403. 「19. Badruddin Tyabji」 CWMG Vol.5, pp.20-21. 「271. Mr. Byte's Will」 CWMG Vol.5, pp.288-289. 「200. Report of Superintendent of Education」 CWMG Vol.6, pp.205-207. 「222. Women's Education」 CWMG Vol.6, pp.226-228. 「23. Education for Girls」 CWMG Vol.7, p.28. 等に見解がみられる。
- 41) 「252. Baroda : a Model Indian State」 CWMG Vol.4, pp.302-303. 「396. Compulsory Education in India」 CWMG Vol.4, pp.441-443. 「33. The London Indian Society and Prof. Gokhale」 CWMG Vol.5, pp.39-41. 「271. Mr. Byte's Will」 CWMG Vol.5, pp.288-289. 「387. What is Education?」 CWMG Vol.6, pp.457-458. 「160. "Hind Swaraj" Chapter XVIII: Education」 CWMG Vol.10, pp.298-302. 等に見解がみられる。
- 42) G. K. Gokhale (1866-1915)。ボンベイ州出身の国民会議派の指導者の一人で、立憲的自治運動に尽力した。帝国立法参事会員に選ばれ、初等教育の普及、教育予算の増額、無償義務教育の制度化を参事会に繰り返し要求した。ガンディーの南アフリカでの闘争を支持し、しばしば助言を与えている。
- 43) 「33. The London Indian Society and Prof. Gokhale」 CWMG Vol.5, pp.39-41., 「199. a Splendid Record」 CWMG Vol.12, pp.238-241.
- 44) ダースグプタは、ガンディーとゴーカレの初等教育に対する見解の違いについて、1) ガンディーは法的に義務化しようとはしていない、2) 国家歳入に頼るのではなく、学校を経済的に自立させようとした、3) 識字そのものより初等教育の内容と質を重視していることを挙げている(石井一也監訳、アジット・K. ダースグプタ著『ガンディーの経済学』作品社、2010年、225頁。)
- 45) 「160. "Hind Swaraj" Chapter XVIII: Education」 CWMG Vol.10, p.300.
- 46) 弘中和彦『万物帰一の教育』明治図書、1990年、91-92頁。
- 47) M. K. Gandhi, op.cit., 1927, pp.350-351.
- 48) M. K. Gandhi, op.cit., 1927, p.353.
- 49) 「192. The Present System of Education」 CWMG Vol.15, p.257.
- 50) 「200. My Notes」 CWMG Vol.28, p.361.
- 51) 「89. National Education」 CWMG Vol.24, pp.156-157.
- 52) 1919年から1932年まで、サバルマティ・アシュラムから発行された週刊機関紙。
- 53) 「89. National Education」 CWMG Vol.24, p.157.
- 54) Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938, p.121.
- 55) 「Spearhead of a social revolution」
- 56) インド人資本による土着産業の推進と外国製品のボイコットを含むインド国産品の生産と愛用奨励を目指す運動であり、民族独立を意味するスワラージとともにインド民族運動における象徴的スローガンである。
- 57) 1919年にアーメダバードで創刊されたグジャラート語の機関紙。1931年まで続けられた、英語版は同年『ヤング・インディア』という名称で創刊された。

- 58) 「127. Questions on Education-II」 CWMG Vol.42, p.91.
- 59) 義務教育の実施には巨額な財政を要したが、安定した大きな収入源であった酒税は、ガンディーの指導による禁酒政策のため期待できなくなった。
- 60) 「333. Primary Education in Bombay」 CWMG Vol.72, p.258.
- 61) Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938, p.121.
- 62) Ibid., pp.109-110.
- 63) Ibid., pp.161-162.
- Gandhi, M. K., *An Autobiography*, Navajivan Publishing House, 1927.
- Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938.
- Gandhi, M. K., *Satyagraha in South Africa*, Navajivan Publishing House, 1928. (田中敏雄訳『南アフリカでのサットイヤーグラハの歴史』(全2巻)(東洋文庫736)平凡社, 2005年。)
- Patel, M. K., *Educational Philosophy of Mahatma Gandhi*, Navajivan Publishing House, 1953.
- Anderson, James D., *The Education of Blacks in the South 1860-1935*.
- Washington, Booker T., *Up from Slavery*, Dover Publications, 1995.
- Varkey, C. J., *The Wardha Scheme of Education*, Oxford University Press, 1940, pp.160-162.
- Collected Works of Mahatma Gandhi Online (<http://www.gandhiserve.org/cwmg.html> 2012年5月10日アクセス)

【主要参考・引用文献】

- 弘中和彦『万物帰一の教育』明治図書, 1990年。
- 弘中和彦「マハトマ・ガンジーの「手仕事を通しての教育」の意味について『九大比較教育文化研究施設紀要 第38号』1987年。
- 石井一也監訳, アジット・K. ダースグプタ著『ガンディーの経済学』作品社, 2010年。